

「サケ」 1万キロ以上の長い旅

母川回帰率は0.3%

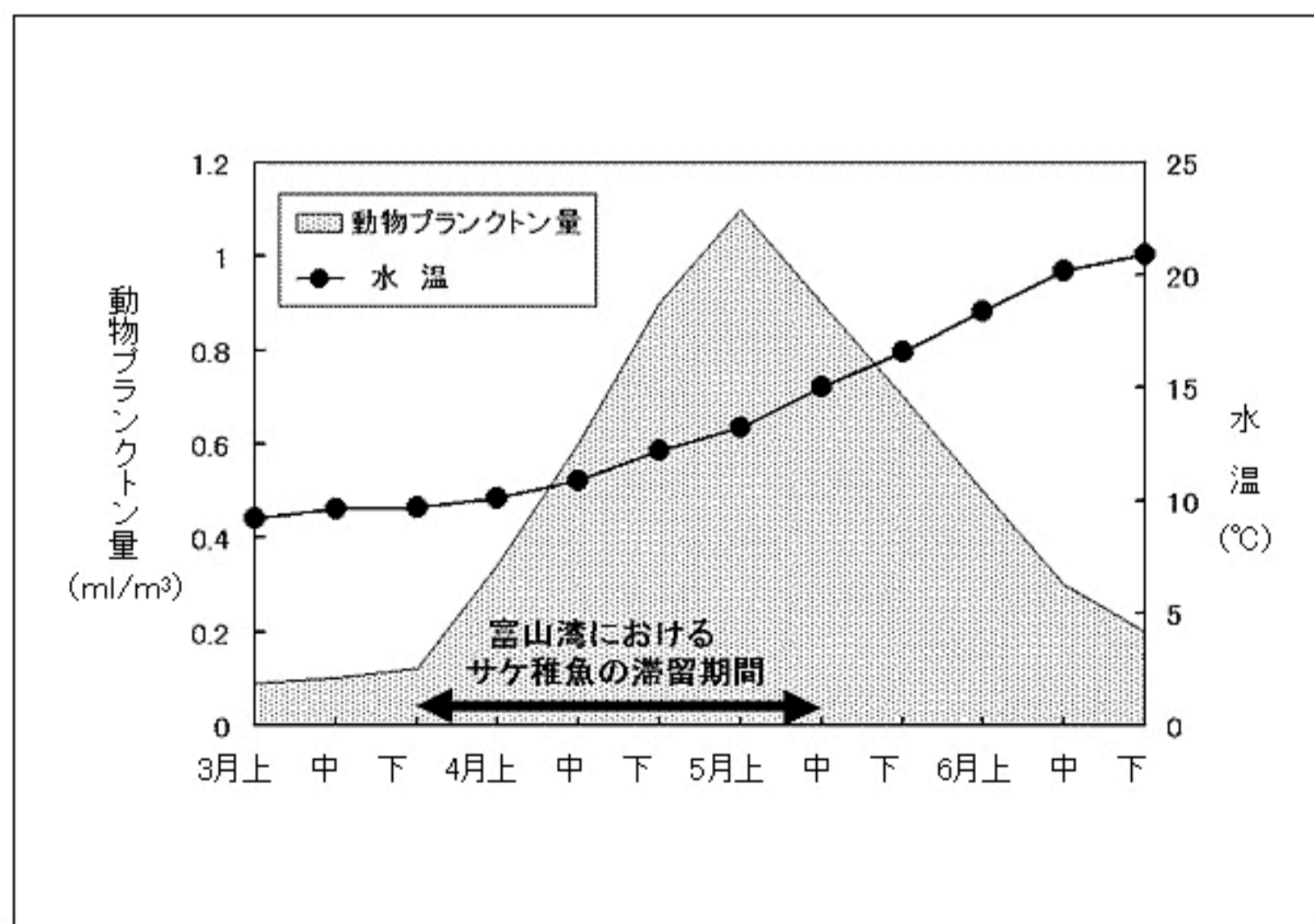
富山県では、毎年10月からサケの増殖作業が始まる。産卵のために母川回帰した親魚は、ヤナなどで捕獲され、ふ化場で採卵・人工受精の処理を施されて天寿を全うする。受精卵からふ化した稚魚は給餌飼育され、2～3月に河川へ放流される。稚魚は河川を下って富山湾に入り、やがて北太平洋へと1万km以上の長い旅立ちに出、3～5年後に成熟して母川回帰する。過去5ヶ年の平均回帰率は約0.3%と推定されている。

県水産試験場では、母川回帰するサケを増やすために、稚魚をいつ、どれくらいの大きさで放流すれば良いのかを検討してきた。富山湾に下った稚魚の生態調査と沿岸域における生育環境調査を行った結果、汀線域(岸からの距離0～100m)で稚魚が多く観察される時期は3月下旬～4月上旬で、稚魚の大きさは4～5cm、体重0.5～1gであること、その時期の表面水温は9～10℃であることが分かった。

成長に伴い稚魚の分布域は徐々に広がり、4月中旬～下旬まで約7cm、約3gの稚魚が沿岸域(同0.5～3km)でよく観察されたが、5月中旬以降は稚魚の姿はほとんど認められなくなった。その時期の沿岸域・沖合域の表面水温は約15℃であった。

これらの調査結果から、富山湾に下った稚魚は、約7cm、約3gに成長し、沿岸表面水温が15℃を示す5月中旬までには富山湾を離れ、北太平洋への北上回遊を行うものと考えられた。また、稚魚にとって重要な餌料である動物プランクトンの富山湾での発生量は、2～3月には極めて少なく、4月から急増し、6月には減少傾向を示したことから、富山湾の餌料環境はサケ稚魚の成長にとって良好であることが分かった。

これらの研究を基に、富山県では毎年約3千万尾の稚魚を、3月下旬までに、5cm、1g以上の大きさを目標として県内河川に放流されている。(角祐二)



富山湾沿岸域における動物プランクトンの消長